

普及せざるものありしを以て、(緑色の釉を施せる陶器は已に漢代に存在せるも)此の時期に於いては、土器は比較的廣汎なる需要を有し、従つて其の技術の進歩亦た前後に絶するものありしを推察するに足る、我が滿洲發見の土器は恰も此の時代のものに屬することは、之と同時に發見する所の遺物等に照し工、吾人の信じて疑はざる所なり、されば此等の土器は、其の製作最も精巧を竭せるものにして、形式の優美にして變化多様を極め比較的美麗なる裝飾を施されたるものなるを知る可く、之が研究は西安洛陽等支那内地發見のそれと相俟ちて、支那考古學研究の基礎として肝要なるのみならず、支那工藝史家の忽にす可からざるものたるや論無かる可し。

(附記) 挿圖土器發見地名 (イ)ハ(ニ)チ(リ)レ(ソ)ツ(ネ) 旅順、(ロ)ヘ
(ル) 熊家屯、(ホ)カ(マ) 熊岳城、(ヨ)タ 遼陽

大同江南の古墳と樂浪王氏との關係

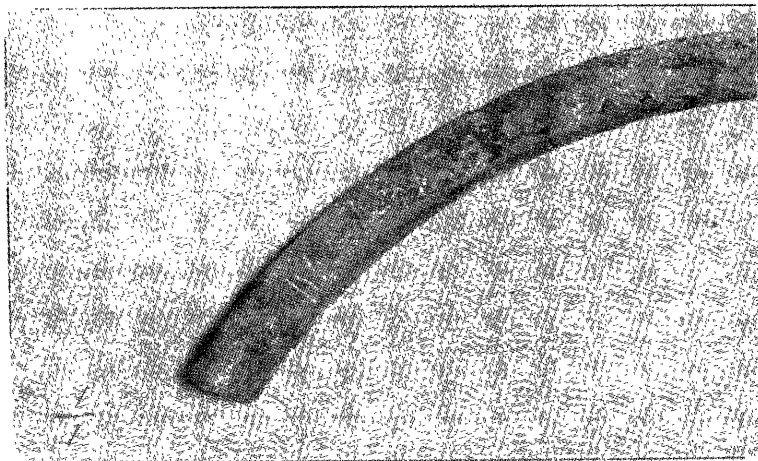
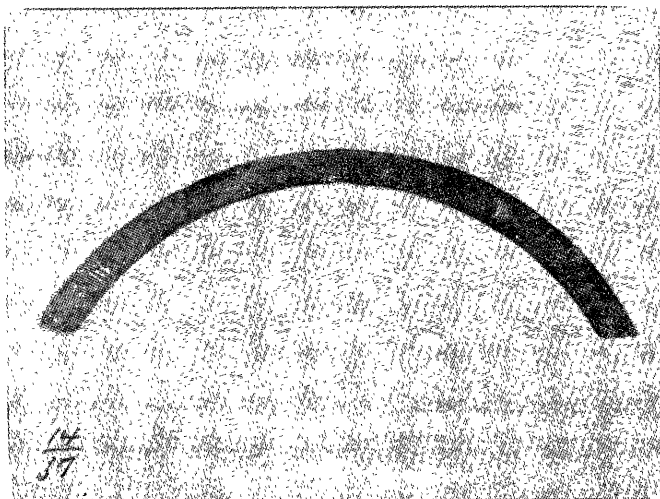
今 西 龍

(主旨)大同江南に於ける萩野博士調査の埴塚古墳は樂浪王氏に關係ありと思はるゝ事を考證せんとす。

(要點)平壤附近の古墳に石槨と埴塚との二種あり……大同江南靺鞨古墳略説……萩野博士調査の埴塚古墳遺物に玉□の銘あり……此等古墳を残せしは何者なるか……平壤地方古今の住民に就て……樂浪漢民族の遺物か高句麗の遺物か……小生が高句麗説を執りし理由……王□の銘は姓名と解すべし……樂浪の名宦及人物……樂浪の土葬王氏……高句麗の王氏……此靺鞨古墳は樂浪王氏に關係ありと認む……小生は高句麗説を撤回す……高句麗古墳の遺物を豫想す。

朝鮮平安道平壤附近の古墳に石槨と靺鞨との二種あり。石槨古墳に就ては明治四十二年冬萩野博士之を大同江北の都墓洞平壤郡林原を初めとし江東街道に沿うて江東郡鏡浦里王墓洞の皇帝陵に至るまでの間に多數を發見し其二三を調査せられたり、此石槨古墳は明に高句麗の遺物と認め、そのものにして本篇に論

大同江南博榔古墳內發見覆輪金具銘



六和大學列品室所藏

大 物 實

せんとするものにあらず。

輒榔古墳は大同江南即ち平壤と大同江を距てたる丘陵地に數多遺存し恐らくば千を以て數ふべし、此古墳の榔輒は多く土民の堀探するところとなり側面に幾何學的模様ある古輒は此地方の民家の墻壁に積まれて散在し平壤市外の彼の箕子廟の壁中にも之を見たりき、斯く一部掘探の痕あるもの少なからずして此等が盡く輒榔なるより推すに平壤對岸のものゝ大多數は輒榔なるが如し此古墳は現在の高四五尺より或は二丈に至るものあり、其外形今や甚しく夷して其原形が圓なりしか方なりしかは頗る判別し難きも耕作者は其基地として方形に除耕す、此古墳が學術上の目的を以て調査せられしは明治四十二年秋關野博士谷井學士等之を調査し貴重なる遺物を採集せられしを始めとし其後約一ヶ月半を経て萩野博士もまた成川へ史料探訪の歸途江東郡皇帝陵を調査せられしも寒氣の爲め意の如くならざりしかば之を中止

して平壤に還られしに在平壤の小城今泉兩氏博士に助力して其大形なるものゝ一を淺掘せられ博士の調査せられたるにあり、此際予も博士に助手として隨行し居たりき、今小生が論ぜんとするは此古墳にして此古墳に就ては昨年八月發行の東京人類學會雜誌第二十五卷第二百九十三號に口繪として四枚の寫眞を掲げ其概略を説明し置きしを以て茲に其概説をも略すべし、但し其輒榔内發見の遺物は二個の大甕、四個の小瓶或は鉢、鐵刀、斧鋤の如き鐵物、長宜子孫甕、覆輪様の鍍金々具二種兩三個分、リウゴ様の紫玉器、小銀環、銅の指環様のもの、用法不明の銅條、漆塗の痕ある土塊等なるものが此内鐵刀斷片の外は盡く整理修繕して文科大学列品室に保藏せり、偕て此遺物中の鍍金せる覆輪金具の一斷片に極めて淺く毛彫りの如く二字を刻せり、隸書にして上の一字は明に王の字なれど下の一字は通の字ならんか銅質酸化のためには甚だ不明なり(圖を參考せ)。

此等靺鞨古墳を作成せしは何民族なりや何時代なりや、之を決するには先づ此地方の歴史的變遷を調査せざるべからず。

平壤は古來半島北部の重要地にして支那民族が建てし古朝鮮の首都王險城の址なり、尤も王險城を平壤に充つるには異論者なきにあらざれども大同江は漢書地理志の列水にして王險城が平壤なることは確實なりと信ず、偕て此支那民族の獨立小王國即ち衛氏朝鮮は漢武帝元封三年(108B.C.)漢帝國のために滅ぼされたり、漢は衛氏朝鮮の故地に玄菟樂浪眞蕃臨屯の四郡を置き全く漢帝國の一部とせしが昭帝の始元五年(83B.C.)に至り四郡を併せて二郡とし玄菟郡は鴨綠江北修佳江流域に治し玄菟に就ては以下説なし樂浪は今の平安黃海京畿の大部其他を領有し朝鮮縣を主縣とし其郡治は王險故城址即平壤、もしくは平壤の附屬地に在りしと確實なり、而して大同江口即ち列口の地は海を渡りて先づ之を得るの位置にありて此樂浪と

支那本土との海上交通は實に容易なりしも漢帝國の側面にありしかば自ら朝鮮縣幽僻となりて土豪の勢力も本土の郡縣に比して多大なりしが如し、後漢の初め土人王調なる者其太守を殺して自ら太守と稱せしとありしも間もなく平定せられ漢の郡縣に復したり、後漢に於ては其繁榮前漢の時には及ばざりしが如く感ぜられるれども決して衰微せしといふべからざるが如し、後漢末より北には高句麗の壓迫日に強くなるが如し、韓民族の興起するあり樂浪の勢力は次第に衰退せしものゝ如し、然るに漢獻帝の建安中遼東の豪族公孫康が屯有縣以南の地を割き帶方郡を置き其經營に注意せしより魏の初めには樂浪帶方の威稍恢復されたるが如し、樂浪の中心は依然として平壤にありしと論なし、帶方は漢水即ち帶水の流域を領有し北は慈悲嶺を以て樂浪と界し西北は今の黃海半島の全部を領有して列口を有せしなるべし而して其治所は今の漢水の下流にありしならむ(帶水は今漢

江なり小生は臨津江説を採らず）然るに魏の正始年間（241—249A.D.）に韓民族蜂起して一時二郡を滅ぼすに至れり、此時高句麗は機に乗じて南進し一時平壤に入りしもの、如く百濟も亦此頃南方に起りしが如し、茲に於て曹魏は母丘陵王頌を將として高句麗に大討伐を加へ大に之を懲らせしかば魏の威力は復た半島を壓伏し樂浪帶方の幾分を回復するを得て

戰勝將軍王頌は帶方太守として官に到り威勢遠く我が九州島にまで波及せしも是亦一時のみ、然れども晋の惠帝西紀三百年頃の頃尙ほ樂浪の存せしことは晋書載記劉聰傳に劉聰が樂浪朝鮮縣に亡匿せし記事あるに
よりても明なるが此頃より遼東の張統なる者帶方樂浪に據りて高句麗の美川王と連年攻戰せり、尤も此頃に至りては名は依然として帶方樂浪なれども實は大同江流域の一地方にすぎず北は高句麗に南は百濟に侵奪せられて今やたゞ昔時の名目を平壤を中心とせる小地に存せしにすぎざりしなり、或は平壤既に

高句麗に陥り大同江下流に名目のみを維持せしものにあらざるか更に攻究を要すべし、此獨立的小君主たりし張統も晋愍帝建興元年四月（313A.D.）に至り其民千餘家を帥ひ去て慕容魔に歸せしかば此時以後大同江流域は確實に高句麗の領有となれり。

緒て高句麗は第四世紀の初には大同江流域を確實に領有してより平壤には特に重きを置きしもの、如かりしに其後百餘年を経て長壽王十五年には遂に平壤に奠都するに至れり。

此時既に優秀なる支那文化を攝取し居りし高句麗は更に一層支那文化を大同江流域に輸入し此地に榮へしこと三百年唐の高宗の總章元年（688A.D.）唐に滅されたり。

唐は此地に安東都護府を置き之を直轄せんとせしも事難かりしかば間もなく府を遼東に移せり、是より大同江流域は新羅の有に歸し亦昔日の繁榮なく二百年を経て第十世紀の初め此荒廢せる地は高麗

太祖王の經營するところとなり王は此地に人を移し民を植え平壤を西京とせしかば此地また繁昌し半島北半の中心となれり、高麗朝の末に蒙古人之を直轄領とせしが元國衰ふるに及び高麗に復するを得高麗の後李朝五百年を経て現今に至る。

平壤地方の歴史かくの如し而して此等歴代住民の遺物にして新羅以前に屬するもの、地上に存ずるもの稀少なり、然らば彼の靺鞨古墳は如何なるもの、遺せしものなりやといふに前述の次第に依りて左記の何れかに屬すべきものなり。

- (一) 古朝鮮漢民
- (二) 樂浪の漢人
- (三) 高句麗
- (四) 新羅
- (五) 高麗もしくは李朝人

此れなり、既に住民あらば必ず死あり葬あり墳墓あり如何なる住民も必ず墳墓を残すこと勿論なれども其多くは年代を経れば消滅し何物をも遺存せず彼の靺鞨石槨の墳墓の如きは富と力とを要するを以て何れの住民も盡く作成し得べきものにあらず、偕て

江南の靺鞨古墳の作成者を此五住民中より考ふるに第一の古朝鮮王國は箕氏朝は須らく之を措き衛氏王國は榮ゆること僅に三代七十年のみ吾人は地下に遺物なしとはいはず古墳存せずとは斷言せざれども彼の幾百累々たる同形式の古墳を此時代に屬するものとして扱ふこと能はざるなり、第四の新羅時代たるや此地方の最も衰退せし時代にして其國の邊鄙たりしより推すもかゝる古墳を残せしとは考ふること能はず、次に第五の高麗朝若くは李朝のものにあらずることは其構造よりして明白なり、然らば第二の樂浪漢人の遺物か第三の高句麗人の遺物ならざるべからず。

萩野博士及び博士に隨行せし小生は先づ大同江北に石槨古墳を見て後に靺鞨古墳を見るに及び平壤を中心とせる古墳には明に石槨と靺鞨との二大別あることを確めしが博士の調査目的は他に重要なものありて古墳調査の事は副事業にすぎざりしを以て或

る程度以上調査を進めざりしも其當時思へらく石柳古墳の高句麗の遺物たること更に疑を容れずと雖、石柳古墳に至りては少しく疑あり或は樂浪漢人の遺物にあらざるかと、四十三年春歸京の當時は小生も此意見を多少懷抱せしも間もなく石柳古墳も石柳古墳と全しく高句麗の遺物なりと確信するに至れり其理由とせしものは(一)柳の用材の相異と此相異より生じたる構造の別とは之を作成民族の別に本づくとするに能はざるが故に石柳古墳を高句麗の遺物と認むると同時に石柳古墳をも其遺物と認めて差し支へなかるべし(二)樂浪帶方の守令は皆中央政府より派遣せられたる人なるが故に其墳墓を任地に残すが如きは稀有なるべし而して僻遠の小郡たる此地の土着民には此等石柳墳墓を作成する富も力も存せざりしなるべし(三)平壤は樂浪の中心としてよりも高句麗の都城として繁昌せるのみならず高句麗には世家多し厚葬の風ありしと傳へらるゝ高句麗なるを以て此

古墳をこれに屬すとすは穩當なること(四)調査未だ充分ならず石柳古墳の如き未だ遺物の發見なきに當り机上の空論を以て石柳古墳との別を論斷すべからず而して調査の此程度に於ては先づ高句麗となすことの穩當なる事以上の四つによりて小生は石柳は勿論の事石柳古墳もまた高句麗の遺物なりとの説を持せしが其説たるやもとより薄弱なるものなりき而して彼の王□の銘は如何に解釋すべきかは思ひ當らざりしなり。

然るに去る十一月二日文科大學列品室に於て彼の萩野博士携歸の遺物を整理し乍ら思ひ付きしは遺物中の覆輪金具の王□の銘は姓名を刻せるものにあらざるか是れ王姓の某の姓名にあらざるかと茲に於て樂浪帶方の人物を調査せり李朝の柳得恭は四郡志を著はし韓致論は海東釋史を致論の姪鎮書は海東釋史續を著はし如此の調査に非常の便宜を與えたり小生の此調査亦此三書に負ふところ多し。

偕て樂浪帶方の宦人には(一)劉憲更始の時樂浪太守たり土人王調に殺さる(後漢書卷一百六王)(二)王遵光武時樂浪太守となり(三)鮮于嗣樂浪太守(三國志景傳)(四)劉茂樂浪太守(全上)(五)弓遵魏王始年中帶方太守(全上)(六)劉夏魏明帝中帶方太守(全上)(七)劉昕全上(八)王順魏正始中帶方太守(全書倭人傳)(九)崔岳晉朝鮮令(晉書載記劉聰傳)等其重なるものにして王姓の者に王遵王順の二人あり共に有爲の大守にして注意すべきものなれど家を任地に殘せしやは頗る疑なき能はず。

然るに此地の土豪に就て調査するに樂浪の人にして名を記録に殘す者は王氏のみにして王氏は實に樂浪に始終する一大豪族たり尤も樂浪以前古朝鮮の時にありても漢に降りし將軍に王暎あり史記 朝次に誌鮮傳す王仲が來住せしも此時代なりと雖未だ王氏が隆盛せしにはあらざるべし、史姓韻編には箕氏朝鮮を奪ひし燕人滿を王滿とせり是れ史記朝鮮傳に朝鮮王滿とあるを朝鮮の王滿とよみしより出てし誤謬にして此王字が姓にあらずして主長者の稱號なることは史記に「王^{ミナ}之^ニ」の語または他に裨王の號あるによりて

も明なり、茲に樂浪の王氏に就て調査するに後漢書卷一百六王景傳に

王景字仲通樂浪訥郡人也 八世祖仲本琅瑯不其人 好道術明天文 諸呂作亂 齊哀王襄謀發兵而數間於仲 及濟北王興居反 欲委兵師仲 仲懼禍及乃浮海東奔樂浪山中因而家焉 父闕爲郡三老 更始敗 土人王調殺郡守劉憲 自稱大將軍 樂浪大守 建武六年光武遣大守王遵 將兵繫之 至遼東 闕與郡決曹史楊邑等共殺調迎遵 皆封爲列侯 闕獨讓爵 帝奇而徵之 道病卒 景少學易遂廣鬪衆書 又好天文術數之事 沈深多伎藝

とこれより王景が永平十二年帝に引見せられ治水の大業を成し後廬江太守となり良政を行ひし事を誌せり。

尙ほ魏書卷十三皇后列傳には文成文明皇后馮氏の母は樂浪の王氏なることを誌し、周書卷二十一北史

卷六十一王盟傳には其先を樂浪の人なりとす王盟は當時の名家の子にして明德皇后の兄なり六世の祖たる波より傳あり尙ほ萬姓統譜には隋の王盟の先を樂浪の人となせど隋書卷四十五王盟傳には其事なし

樂浪人物中王氏以外に聞ゆるものなし王氏が樂浪唯一の望族として繁衍せしこと推知すべし

樂浪王氏の諸流の中には樂浪の衰退するや百濟高句麗に入りて後裔の家を起せしものも在るが如し、

尙ほまた別流の王氏あり元遺山集卷十六王黃華墓碑には「姓王氏、家牒載、其二十二代祖烈太原祁人、避漢末之亂、徙居遼東、曹公恃敬不應、隱居終身、其後遼東亦亂、子孫散處東夷、十七孫文林仕高麗爲西部將云々」とあり此王氏は樂浪王氏の後にあらずして別流の王氏なり、舊唐書卷百六王毛仲傳には本高麗人なりとし、全卷百十王思禮傳には營州城傍高麗人也とあり、新撰姓氏錄左京諸蕃上に「王。高麗國人從五位下王仲文之後也」とし日本書紀文武紀大寶三年四

月乙未に從五位下高麗若光賜王姓とある皆注意すべきの文なり、而して百濟新羅の王氏につきては直接の關係なきを以て之を列擧するとを省くべし、但し樂浪王氏の繁衍せしことにつきては坪井文學博士は「彼の史氏の祖先も王氏に關係ありさう也王辰爾の王怪むべし文氏の祖王仁は漢人の裔にして元と樂浪より入て百濟に仕へたるものと思はる猶更に樂浪王氏に關係あるが如し」と指教したまへり。

偕て萩野博士調査の靑柳古墳内遺物中の覆輪金具に刻せる王□は王姓某の姓名たるべし、其姓名たる以上は此古墳を以て王某に關係あるものと知るべし而して其王氏たるや樂浪王氏なるべく高句麗王氏にあらざるべし、但し王氏が平壤地方の豪族として盛大なりしは樂浪時代にして高句麗朝に入りては唯存在せしに止まるを以て小生が先に高句麗古墳と設定せし理由の第二が誤認なるに當りては之を樂浪王氏關係のものとすること穩當にして高句麗王氏關係の

ものとするは牽強たるを免れず、小生從來執りし高句麗説を撤回して樂浪説に従ふものなり、然れども千を以て數ふる靺鞨古墳盡く樂浪漢人もしくは其後裔の墳墓なるかといふに靺鞨と石槨とを以て直に漢人と高句麗との別とするには尙一層の研究を要す、

高句麗の樂浪帶方の地に入るや漢人と俗を混ざる事なかりしとはいふべからず、文化を模すると共に祭葬の風を模するものあるは當然なればなり、終りに特に記すべきは萩野博士調査古墳の靺鞨は關野博士調査の靺鞨及び此地方に散在する古靺鞨に比して特に大形にして他の靺鞨に通有なる喰違の凸凹條なく又槨全體より云へば隱のアーチをなす一部の靺鞨の外には紋様なき事にして頗る注意を要すべき點あり、然り而して今日まで調査されし靺鞨古墳を高句麗のものにあらずとするととは正確に高句麗遺物として見るべきは唯二三の瓦片と一二土器あるのみなれど小生は高句麗古墳遺物の決して樂浪古墳遺物に劣るものにあ

らず且つ類似の品なることを豫想す、而して今日に於ては本學報第一卷第一號に收められし拙稿新羅舊都慶州遺物の條に論ぜし日本及三韓文化説には多少の訂正を爲さるべからず。

萩野博士が博士採集の材料を博士の報告公表前に小生に使用することを許されしのみならず助手たりし小生に獨立に考説を發表することを許したまひ研究上種々指導を賜はりしことを謝し奉る。

明治四十四年十二月一日

カライサンといふ地名に 就いて

池 内 宏

所謂カライサンは、文祿元年七月十四日及び同十六日の秀吉朱印狀に見えたる朝鮮の地名にして、即ち七月十四日の脇坂中務少輔治宛朱印狀に⁽¹⁾去月○七日からいさん口[○]に相働候處、敵船差向、其方大船

(1) 『脇坂家傳記』(改定史輯集覽別記類第二〇一)及び『古文書集』卷七所收。